Nathanael West 研究
"A Cool Million"

今 井 夏 彦

1940年に自動車事故で37歳の短い生涯を閉じた Nathanael West (1903–40) は，1930年代に4篇の小説を発表したが，いずれもあまり人々に読まれることはなかった。その理由のひとつとして，1930年代という不況のひどかった時代にウェストの作風が合わなかったことが挙げられよう。しかしながら，60年代に入る頃から脚光を浴び始め，現代の不条理を先取りした点も相いまって，今では20世紀の重要なアメリカ作家の一人に数えられるようになった。

中でも *Miss Lonelyhearts* (1933) は，ウェストの最高作とされている。(1) Miss Lonelyhearts はある新聞の「人生相談」欄の回答者であるが，気軽に引き受けたその回答者という役割がついには彼を押しつぶしてしまうことになる。ウェストは，この哀れな主人公の苦悩を，豊富なイメジァリイとシュールレアリスティックな手法を用いて鋭く描き出し，それをそのままその時代の持つ苦悩へと，みごとに昇華させている。この作品の出版当時の書評に目を通してみると，*Books* の F.H. Britten は "grotesquely beautiful novel"(2) と述べ，T.C. Wilson は *Saturday Review of Literature* において "a comedy with tragic implications"(3) と見なし，あるいは，*New York Times* の評者は，この作品にあふれている機知と諷刺を，スウイフトのそれと同列に論じている。(4)

Norman Podhoretz は "A Particular Kind of Joking" と題する批評において，*Miss Lonelyhearts* とウエストの最後の作品となった *The Day of the Locust* (1939) を高く評価し，ウェストを最初で最後の喜劇作家であると述べ ("His name seldom comes up in discussions of modern American

literature, and even now it is not clearly realized that, for all the 'bitterness' and 'savagery' people find in his work, he was first and last a writer of comedy"[5]), さらに次のように賞讃している。

West was one of the few novelists of the 30s who succeeded in generalizing the horrors of the depression into a universal image of human suffering.[6]

言うまでもないことだが，フィッツジェラルドによって"jazz age"と名付けられ活況を呈した1920年代は，ニューヨークのウォール街の株の大暴落によってアメリカ社会全体がどん底に落ちこみ，その幕を閉じる。1933年に登場したルーズヴェルト大統領が有名なニューディール政策を施行し，アメリカの復興を図るわけだが，この年には，アメリカの労働人口の約四分の一に当たる1283万人の失業者が出たという。また，1930年の国勢調査において，都市人口と農村人口の数字が逆転したという事実も，注目に価いする。1930年には，56%を越える人が都市の住民となっている。ニューヨークのような大都市では失業者がひしめき合っていたであろうことは，容易に想像がつく。[7]

Alan Ross は *The Complete Works of Nathanael West* の introduction において，芸術家とその時代の社会との関係について，"作家は，地動計のように社会の感情の図表を記録しなければならない"と論じ，特に20年代及び30年代における文学の役割をその点で強調している。とりわけウェストは，一般大衆の生活の恐ろしいまでの空しさを意識していた作家だといえる。

Basically, West was always a sociological writer, moved by the horrible emptiness of mass lives; and in this sense all his books are indictments, not so much of economic systems, but of life itself. *Life is terrible*, that was the despairing conclusion that led nowhere and which was the motive spring for his novels.[8]

この意味でも，ウェストは，ポドーレツの指摘するように，大不況のさ中の人々の恐怖を普遍化し得た作家であると言えよう。ウェストの三作目の *A Cool Million* (1934) はまさしく時宜をえた作品であった。前作の *Miss Lonelyhearts* とはやや趣をかえ，軽快な筆致で描かれた小説だが，そこに読みとれるものは否応なく我々の心を暗くさせる。抑制されたトーンで，ただ単に，ストーリーを追っているだけのように感じられるが，主人公の最期の救いのなさが読者の胸を締めつける。サブタイトルの *The Dismantling of Lemuel Pitkin* の dismantling（解体）とは，文字通り主人公の肉体的解体なのである。

再び，この作品発表時の書評を概観してみると，完成度の点で前作 *Miss Lonelyhearts* より多少劣るが，その痛烈な諷刺性を評価しているものが多いようである。*Books* の F.H. Britten は "*A Cool Million* is a thoroughly intelligent book, full of giddy nonsense and smart penetration."(9) と述べ，*Review of Republics* の評者は，深いものはないが楽しいパロディであるとしている。("*A Cool Million* is a delightful parody, with satire which hits uncomfortably near the truth. It is not a profound book but it is a funny one."(10)) *New York Times* の F.T. Marsh はその書評の中で，やはり *Miss Lonelyhearts* ほど優れてはいないが，"But as parody it is almost perfect. And as satire it is a keen, lively and biting little volume, recommended to all and sundry. It is funny, but there's method in its absurdity"(11) とみている。*New York Herald Tribune* の Lewis Gannett の見解によると，この作品は "mordant fable" であり，さらに，他の多くの批評と同様に Horatio Alger の成功物語のパロディであると考えられているようである。("A satire on the great American Success Saga, in the form of an Alger-esque tale which runs the other way."(12))

Horatio Alger, Jr. (1834-99) は，ユニテリアン派の牧師の長男としてマサチュセッツに生まれ，ハーバード大学を卒業したが，自分の境遇に反発してしばらくパリで放浪したのち，説得されてアメリカに戻って牧師の職に就いている。しかし，数年後その職を辞し，Newsboy's Lodging House

のチャプレンとなって文学活動に入った。少年向けの作家として，アルジャーは，40年間に約120～30冊の本を書き，その総発行部数は2,000万部以上であると言われている。代表作は，*Ragged Dick Series* (1867), *Luck and Pluck Series* (1869), そして *Tattered Tom Series* (1871) 等である。

貧しい少年が，あるいは田舎出の少年が都会に出て，名を挙げ，富を勝ち取り，成功する——これがアルジャーの作品のパターンであった。しかも，それを，父親のない少年がさまざまな逆境と闘い，母を養いながら，自らの力で現実に直面しつつ見事に果たすのである。「労働と勝利」「努力と成功」，「実践と勇気」，「向上への闘い」といったタイトルが如実にそのことを証明している。努力をすれば必ず報われるという、アメリカの永遠の夢を信念化したものである。

> 現実でありながら実際には関心を呼ぶことのなかった人口爆発をはらんで，都市化や産業化が着々と進行していた時代にあっては，個人は急速に進展する大衆社会の中に，埋没してしまう危険にさらされていた。アルジャーの少年主人公たちは，実に見事な言葉で，清教徒やフランクリン流の個人主義という古くからの美徳をくまなく語り直したのである。正直で，帽子をちょこんと横っちょにかぶり，お金を貯め，よく入浴して清潔を旨とする少年であれば，生まれは貧しくともやがては大成功をおさめ，金持の娘と結婚するのが定石であった。(13)

このようなアルジャー流の成功物語が，時代と社会背景の相違はあっても，現実のアメリカ社会の中で可能であるのか，ウェストの強調したかったのはこの点であろう。勿論，その成功の夢は幻想にすぎないということを，ウェストが軽妙なスタイルで諷刺していることは明らかである。

タイトルは，巻頭に引用されているアメリカの古い諺——"John D. Rockefeller would give a cool million to have a stomach like yours" から取ったものである。胃が弱かったというロックフェラーは，もし丈夫な胃が手に入るなら掛け値なしで100万ドル支払うだろう，という意味である。

アルジャーが活躍した頃は，このロックフェラーを始めとして，カーネギー，ヴァンダビルト，グッゲンハイムといった百万長者が輩出した時期であった。

物語の主人公である Lemuel Pitkin は，正直で強く勇敢な17才の若者であり，母親と二人で住んでいるが，その家が抵当に入ってしまい，元アメリカ大統領の Shagpoke Whipple の所へ相談に行く。ウィップルは銀行の頭取であるが Lem に金を貸してはくれずに，Lem の家の牝牛を担保に30ドル手渡し，ニューヨークへ出て一旗揚げるように勧める。

"America," he said with great seriousness, "is the land of opportunity. She takes care of the honest and industrious and never fails them as long as they are both. This is not a matter of opinion, it is one of faith. On the day that Americans stop believing it, on that day will America be lost." (p. 150)

「アメリカは，」と彼はおそろしく真面目な調子で言った。「機会均等の国だ。正直と勤勉を兼ねそなえた者を見捨てることは，決してない。これは見解の問題ではなくて，ひとつの信仰なんだ。アメリカ人がこのことを信じなくなったら，アメリカはその日に滅びるだろうよ。」

こうして，このウィップルの激励の言葉を背に，Lem は立身出世を望むべくヴァーモント州の田舎から大都市ニューヨークへ赴くのであるが，その後もウィップルは Lem に会う度に同じような言葉を口にする。曰く，"...you had an almost certain chance to succeed because you were born poor and on a farm."あるいは，曰く，"...this is still the golden land of opportunity." しかしながら，ウィップルの希望に満ちた口調とは裏腹に，Lem の運命は凋落の一途をたどってゆく。

ウィップルの言葉を信じ込み，ただやみくもに動き回る Lem には，「成功の夢」以外には確乎とした信念のようなものは見受けられない。従って，その行動にも一貫性はまずない。自らの不運を嘆くことはあっても，内省

的な面を持たず，肉体的解体 (dismantling) という悲惨な体験を受けて行くにも拘らず，とにかく次の行動へと移る主人公は，信じられないほどの optimist ではある。その意味では，Lemuel Pitkin はユダヤ的道化である Schlemiel の典型と言えよう。Sanford Pinsker は彼の著書 *The Schlemiel as Metaphor* の中で，ピトキンを "a perfect schlemiel" であると述べている。

The bumbling Lemuel Pitkin from *A Cool Million* (1934) seems to be a perfect schlemiel—at least in the sense that he seems to be totally unaware of the connection between his own ineptitudes and his resulting misfortunes. To be sure, Pitkin's victimhood is directly related to his belief in American myths and, in this sense, *A Cool Million* simply beats at Horatio Alger until he becomes a Lemuel Pitkin.(14)

「アメリカの神話」を信じウィップルをも信じて，彼に従いて行く Lem の "innocence" を，ウィップルは利用する。最後には，ウィップルの身代わりのような形になってピストルで暗殺されてしまうのである。

次に，この小説全体を蔽っているひとつの大きなテーマは，Lem の dismantling に伴う文字通りの "violence" である。アメリカという国の violence については，ウェスト自身の言及があり，彼は，"In America violence is idiomatic...In America violence is daily." と述べたあとで，文学における violence についても触れている。

What is melodramatic in European writing is not necessarily so in American writing. For a European writer to make violence real, he has to do a great deal of careful psychology and sociology. He often needs three hundred pages to motivate one little murder. But not so the American writer. His audience has been prepared and is neither surprised nor shocked if he omits artistic excuses for familiar events.(15)

ここでは，ウェストは，暴力が日常茶飯事のアメリカでは，ヨーロッパと比較して読者がそれに慣れているので，アメリカの作家は自分の小説の中で簡単に人が殺せる，と皮肉まじりに論じている。

ウィップルから30ドル受け取った Lem は，先ずニューヨークに行く途中，車中でのスリ騒ぎで逮捕され，刑務所で歯を抜かれ，総入れ歯となって出所してくる。これが dismantling の始まりであり，彼の成功の夢はこの解体と共になしくずしに崩壊して行く。ニューヨークに着くと，暴走した馬を鎮めるが，彼は馬を逃がした馬丁と感違いされ，その時眼を痛める。（アルジャーの小説では，金持とその娘を乗せて暴走する馬車を主人公が止め，それを機に彼は躍進の道を歩むようになる。）さらに，痛めた眼をセントラル・パークで洗っている時，事件に巻き込まれ，とうとう右眼を失明してしまうことになる。その騒動のときの次の描写は，哀れにも滑稽というほかはない。

The officer dispersed the gathering and everyone moved away except Lem, who was lying on the ground in a dead faint. The bluecoat, thinking that the poor boy was drunk, kicked him a few times, but when several hard blows in the groin failed to budge him, he decided to call an ambulance. (p.184)

「警官が群衆を離散させたあとには，地面に虫の息で倒れているレムが残っているだけだった。警官は，哀れな若者が酔っ払っているものと思い，数回蹴とばした。何回か股のあたりを強く蹴ってもびくともしないので，救急車を呼ぶことにした。」

退院した Lem は，そうとは知らずにサギの片棒を担がされ，再度警察に逮捕される。一ヵ月後釈放された Lem は，「国家革命党 (the National Revolutionary Party)」を結成したというウィップルと，Lem の幼な馴じみで今は娼婦に身を落としているベティに偶然出会う。彼らは，ウィップ

ルの賛同者でインディアンのジェイクと共に，四人で西部と金鉱を探しに出かけるが，Lem は，ならず者のしかけた熊取りの罠にはまってしまう[16]。かろうじてウィップルに救われるが，この時片脚を失った上，近くに住んでいたインディアンに頭の皮をはぎ取られ，義眼と入れ歯まで奪われてしまう。

再びニューヨークに戻った失意の Lem は，なんとかして二人のコメディアンのたたかれ役に雇われる。二人が面白いことを言い合いながら Lem の頭をたたくと，Lem のかつらが取れ，次には義眼と入れ歯が落ち，ついには義足が抜け，その度に観客が笑いころげた。新聞をまるめて，自分をたたく棒をつくるのも彼の仕事であり，終ったあとでその新聞を読むのが唯一の楽しみとなる。しかしながら，何といってもまだ成人前の少年の姿としては，痛々しいかぎりである.

The mental reactions of the poor lad had been slowed up considerably by the hardships he had suffered, and it was a heart-rending sight to watch him as he bent over a paper to spell out the headlines. More than this he could not manage. (p.250)

「彼がこうむっているひどい扱いのために，哀れな若者の知的反応はきわめて鈍くなった。新聞の上に身体をかがめ，見出しの文字を捨い読みしている姿は，胸がはり裂けるような光景であった。細かい活字を読むことは，彼には出来なくなっていた。」

そうやって，新聞の見出しの，ウィップル率いる国家革命党の記事が目立つようになってきたある日，Lem は，同志の一人に国家革命党のための演説を請われ，これに応じて舞台に立つ。「ぼくは道化です。("I am a clown.")」と語り始めた途端，暗殺者により Lem は心臓を打ち貫かれ，あえない最期を遂げる。舞台の上でも，また人生においても道化（シュレミール）を演じ続けざるをえなかった Lem の最期である。

物語には後日譚がある。まず, Lemuel Pitkinの歌ができ，彼の誕生日は国の祝日となる。その誕生日に，今は独裁者となったウィップルが，Lem を讃える演説を若者に向けて行う。若い Lem は，アメリカの成功の夢を実現させるために大都会ニューヨークへやって来た。しかしながら，

"Jail is his first reward. Poverty his second. Violence is his third. Death is his last." (p.254)

「彼の最初の報いは牢獄でした。第二は貧乏でした。暴力が第三で，そして最後の報いは死でした。」

ウィップルによれば，それでも Lem の死は無駄ではない。彼の死によって，国家革命党は勝利を治め，アメリカは立ち直ったのである。ウィップルの演説が終ると，聴衆の若者たちが次のように歓呼し，小説は幕を閉じる。

"Hail, Lemuel Pitkin!"
"All hail, the American Boy!" (p.255)

こうして，Lem は，死んでからも後世に名を残すことになる。それにしても，Lem の正直，誠実，純朴といった美徳は，アルジャーの作品では，必ず主人公の立身出世に役立つものであったが，このパロディでは，それは全く通用せず，いつも誰かに悪用されてしまうのである。最後には，自らの死までファシストであるウィップルに利用され，彼の巧みなレトリックによって美化され，殉教者 (martyr) となり，さらにはアメリカの若者たちの偶像にされてしまう。ウィップルの詭弁がいかに危険であるかは，考えるまでもないことであろう。

それはともかくとして，これほど端的に暴力をとりあげた小説も少いのではないか。ただ American dream のパロディを，あるいは，シュレミ

ールとしての主人公の不運を強調するためだけに，作者は暴力の場面を執拗なまでに描写したのであろうか。大恐慌という特殊な時代背景はさておき，ウェストの胸中には，より普遍的なヴィジョンがあったのではないだろうか。

筆者は *Miss Lonelyhearts* について論じた時に，その作品に見られる「都市的なもの」に注目したが，*A Cool Million* においても，とりわけ「都市」の暴力という問題が大きく浮かび上がって来よう。Leslie A. Fiedler は，*Waiting for the End* の中で，1930年代における暴力の二通りの伝統的な使い方について述べている。

> その第一は，暴力の都市化，すなわち自然の世界から都市の世界へ，人間が耐えねばならぬものから人間が作ったものへと，暴力が移行していることであり，第二は，暴力の称揚，すなわち暴力を「歴史の産婆役」として正当化することである。「革命」をうしろ楯にして，暴力は避けるべく悪ではなく，社会進歩の最高潮，社会生活の極致として考えられるようになった。(17)

言うまでもなくウェストは，とくに *A Cool Million* では，後者の考え方を斥けると共に，前者についても描いたものと見ることができよう。

かっての古代都市は，それ自体がひとつの秩序と価値をもった国家の中心であり，共同体のアイデンティティーの根拠であった。人々にとっては，「都市」は象徴であり，聖域でもあった。ところが，産業革命による近代化に伴って，「都市」のもつ人間に対する意味づけというものが，しだいに変化するようになった。とくに20世紀に入ると，「都市」の機能のみがクローズ・アップされ，「都市」のトータルなイメージまでが人々の精神を侵蝕し始めてくる。そして，単にモノとして存在するだけの都市は，逆に，否定的な象徴性を持つに至るのである。(18) そこから「都市」の必然的にもつようになった「暴力」という問題が抽出されてくるのではないだろうか。

1930年代のアメリカでは，大恐慌により資本主義体制が揺らぎ，社会主義や共産主義が注目されるようになった。社会反抗の文学はその中から生まれてくる。その意味で，プロレタリアとしての社会意識を強くもった作家としては，ドス・パソス，J. T. ファレル，スタインベック，コールドウェルなどを考えることができよう。しかし，ウェストは彼らのリアリズムからは遠く離れたところで，ひたすら芸術としての文学を目指していた。

例えば，自然主義作家である S. クレインや T. ドライサーは，“マギー”(1893)，“シスター・キャリイ”(1900) 等において，いち早く「都市」の非人間的環境を指摘しているが，ウェストは，同時代の作家とは異なるすぐれた技巧を用いて，同じ主題について語ったのである。それについて，ウェストは20代をパリで過ごしたことがあるため，そこでシュールレアリズムの洗礼を少なからず受けているようだ。彼の処女作である *The Dream Life of Balso Snell* (1931)では，主人公がトロイの木馬の体内を放浪するというかたちをとっている。その傾向は，第二作の *Miss Lonelyhearts* でも顕著であり，ここでとりあげた作品では，主人公 Lem の冒険が mock-heroic style で寓話風に描かれていて，かえって読者に強く訴えるところがある，といえる。

さらにウェストは，彼の全作品を通じて終生，「都市」並びにそこに潜む暴力を描いてはいるが，*A Cool Million* ではパロディという文学形式をかりて，とくに「都市」の及ぼす暴力に直截言及しているのである。(dismantling という言葉は，「都市」の解体をも示しているのではないか) それと同時に，国際情勢の中で迫り来るファシズムへの脅威と American Success Dream の諷刺，この両者がこの作品の中でみごとに結実している，と言えよう。

Notes

(1) 拙論参照，「英米文学研究」第13号，梅光女学院大学英米文学会，1977.

(2) F.H. Britten, rev. of *Miss Lonelyhearts*, *Books* (Apr. 30, 1933), p.6.

(3) T.C. Wilson, rev. of *Miss Lonelyhearts*, *Saturday Review of Literature* (May 13, 1933), p.9.

(4) F.T. Marsh, rev. of *Miss Lonelyhearts*, *New York Times* (Apr. 23, 1933), p.6.

(5) Norman Podhoretz "A Particular Kind of Joking," *Nathanael West* ed. Jay Martin (New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1971), p.154.

(6) Ibid., p.155.

(7) 斉藤眞著「アメリカ現代史」（山川出版社，1976）参照。

(8) Nathanael West, *The Complete Works of Nathanael West* (New York: Octagon Books, A Division of Farrar, Straus and Giroux, 1978), p.xi. 本文引用はこのテキストを使用。

(9) F.H. Britten, rev. of *A Cool Million*, *Books* (July 1, 1934), p.9.

(10) Rev. of *A Cool Million*, *Review of Republics* (Aug., 1934), p.90.

(11) F.T. Marsh, rev. of *A Cool Million*, *New York Times* (July 1, 1934), p.6.

(12) Lewis Gannett, rev. of *A Cool Million*, *New York Herald Tribune* (June 21, 1934), p.19.

(13) ラッセル・ナイ著「アメリカ大衆芸術物語—気楽な美の神」（亀井俊介，吉田和夫，平田純訳。研究社出版，1979）第一巻 pp. 88-9. Horatio Alger に関してはこの本と次の二冊参照。① *The Oxford Companion to American Literature* 4th ed. James D. Hart (New York: Oxford Univ. Press, 1965) ② *The Reader's Encyclopedia of American Literature* ed. Max J. Herzberg (New York: Thomas Y. Crowell Co., 1962)

(14) Sanford Pinsker, *The Schlemiel as Metaphor: Studies in the Yiddish and American Jewish Novel* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois Univ. Press, 1971), p.52.

(15) Nathanael West, "Some Notes on Violence." Notes (5) に同じ。p.51.

(16) Irving Malin, *Nathanael West's Novels* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois Univ. Press, 1972). マリンは次のことを述べている—①ならず者は世間の "authorities" を，罠は "a symbol of the entire world" を表わしている。②ウェストが肉体に執着していることが，この作品を "black comedy" 仕立てにして安上りな諷刺から救っている。さらには，その意味でウエストは，同じマリンの著書である *New American Gothic* で扱われている小説のパイオニア的存在である。

(17) 高柳俊一編「都市の神学」（新教出版社，1977）参照。